

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 274

言霊学の歴史 1

日本能の古典である「古事記」や「日本書紀」の神代の巻きは単なる神話ではなく神話の形式を借りた言霊原理の手引書であり、教科書なのだということを、前項、前前項でお話してきました。「古事記」は712年太安麻呂により、また「日本書紀」は720年舎人親王らにより撰上されたものです。

「もしそうなら太安麻呂や、舎人親王たちは、なぜに言霊の原理をそのものずばりと書かず神話の形式を撮とったり、煩雑な神様の名前などを使ったりして、全く廻りくどい方法を用いたりしたのか？」という疑問が、当然起こってきます。

それが民間の 一個人の書いた小説や民話のようなものならともかく、「古事記」や「日本書紀」は、その当時の 行政府の事業として計画され、完成されたものであることが記されています。

とするなら、この記述が言霊の原理そのものを、あからさまに書くことなく、神話の形式を取って、一見なぞなぞのような、文章にあえてしなければならない確乎とした理由があったに違いないのです。しかも暗示している対象の言霊の原理は、人間の精神の究極最高の原理であり 日本語の原典なのです。

この事情を歴史的にさらに説明しようとしますと、少なくとも本この本 1 冊分くらいの紙面を必要となりますから、ここでは結論を手短にお話するにとどめることにしましょう。箇条書きにすると次のようにいうことができます。

一、 大昔、日本人の祖先の長年の研究の末に人間の心の構造が解明され、アイウエオ五十音言霊の原理として完成されました。

二、その原理を保持した聖の集団が地球の高原地帯からこの日本列島に渡ってきました。そして、まず原理に基づいて日本語を作ったのです。また、その日本語が表現する実相そのままの社会・国家体制を築き理想の精神文明を創造しました。

三、精神文明の成果は世界中に伝播し、地球上には数千年にわたって精神文明繁栄の時代が続いたのです。世界の各民族に今なお現存する神話は例外なく「大昔、精神的に豊かな平和な理想時代が存在した」ことを伝えています。これらは事実存在した精神脳時代を、神代という表現で後世に伝えたものなのです。

四、歴史のある時点に、その時までの精神文明に次いで物質文明の創造が急務であることを感じた聖の集団は、精神文明の基礎である言霊の原理を一定の期間、方便として世界の人々の意識から隠してしまう方策を決定したのでした。

なぜなら物質文明は生存競争の場においてのみ、その創造は促進されるからです。物質科学研究は肉強食の競争社会において、最も急速な進歩を遂げることは現代人がよく認識するところでしょう。

平和・互譲 の精神時代は方便として 終焉を告げることとなりました。三千年程前、日本からの精神文明の輸出は停止され、二千年前、日本においても言霊原理の社会への運用は完全に停止されてしまいました。

その 275 につづく

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 275

言霊学の歴史 2

五、この文明創造の方針の大変革にあたって、日本の政府では種々の準備に万全を期しました。その

幾つかの例を次に列挙することにしましょう。

A 言霊の原理の自覚を 現す 3 種の神器 鏡勾玉つるぎ は代々天皇の近くにおかれていました。二千年前、崇神天皇の御代、三種の神器を伊勢五十鈴の宮に天照大神という神様としてお祀りをして、天皇から切り離してしまいました。

この事実は「日本書紀」崇神天皇の章に詳しく載っています。天皇が実践知の鏡である言霊原理の自覚を失ってしまったことを意味します。この歴史的事実を「天皇と神器との同床共殿制度の廃止」と呼んでいます。

B 言霊の原理はただ世の中忘却されたのではなく、物質文明促進のため、一定期間方便のため世の表面から隠されたものです。だから物質文明が進歩し、完成に近づいた時には、再び日本人の脳裏に蘇ってこなければなりません。そのための施策が色々と講ぜられたのです。

C 三種の神器のうち、特に八咫鏡を天照大神としてお祀りした伊勢の神宮の本殿の構造を現在まで「唯一神明造」と呼んでいます。その建築構造は、時が来て言霊の原理から見ると、アイウエオ五十音図にそっくりそのまま写し変えることができるように造られています。

五十音の言霊を並べて人間の精神の理想構造を表したものを器物として形どったのが八咫鏡なのです。

唯一神明造とはただ一つの神の内容が明らかとなるように造られたもの、という意味です。例えば神宮の最高の秘儀として尊ばれる本殿下の「心の御柱」を初めとして本殿の構造、氷木、鯉木に至るまで、言霊の原理に則って形づくられています。

D そして宮中の重要な儀式の形式の中に言霊原理は巧妙に取り入れられました。例えば先に行われた天皇一代に一度の大嘗祭や、天皇の子が皇太子として立つ儀式の一つである壺切の儀など、今では宮内庁の人々でもその意義が分からなくなっていますが、言霊の原理から見ると、どうしてそのような形式で行うのが一目瞭然となります。日本人の宝である原理を儀式の形で後世に伝えようとしたわけであります。

その 276 につづく

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 276

言霊学の歴史 3

E、そしてこの章の主題である「古事記」・「日本書紀」の神代の巻きの神話も、以上を話してきました趣旨に基づいて編纂されたものです。崇神天皇から言霊の原理を信仰の対象として神様に祀ってしまっ七百年、言霊の原理は名実ともに日本人の意識から完全に忘れられるようにしている頃、方策の最後の手段として計画され編纂されたのが「古事記」・「日本書紀」だったわけです。

言霊の原理は、将来の日本人の意識に蘇る時に備えて確かに後世に伝えねばならず、そうは言っても当面の方針に従ってあからさまに書くわけにもいかず、当時の聖たちはさぞ苦心したことでしょう。

その結果、神話という形で言霊の原理の詳細を遺すこととしたのです。この苦心は見事に「古事記」・「日本書紀」の神代の巻きの神話としてまとめられました。

今、言霊の原理がはっきりと解明され理解された眼で記・紀の両書を読みますと、一字一字、一行一行、驚くべき新鮮さで心の中に神話の物語が元の言霊の原理となって蘇ってきます。最初の「天の御中主の神」から五十番目の「火の迦具土の神」まで、がそれぞれ言霊の五十音を表徴した神名であり、五十一番目の「金山毘古の神」から百番目の須佐之男命まで、が言霊五十の運用法なのであることが明らかに理解されてくるのです。

しかも最初の五十の神々が五十音のどれを表すかの要点は、宮中の賢所に二千年間保存されてあったと聞きます。賢所とは文字通り世界中で最も賢いところであるということが言えましょう。

その 277 につづく

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 277

言霊学の歴史 4

「古事記」や「日本書紀」の神代の巻の神話が、日本固有の学問である言霊の原理の教科書なのだという筆者の主張に対して、当然起こってくる疑問に対する回答をお話してきました。

これをお読みになった読者の中には「そんな話は日本のどんな歴史書にも載っていない」と眉に唾されることが多いことでしょう。ただ話を聞いただけではそう思われるのも当然のことです。

しかし、もし読者が古事記の示す天の御中主の神言霊ウ・・・と、先に心の先天構造の項でお話したこ

とを、読者ご自身の心の中に分け行って確かめられるならば、そして言霊の原理が確かに生きている人間の心の構造を表している事実に気づかれるならば、この本に書かれたことが真実かもしれない、と思われるに違いありません。

それらの証明はこの章の次からお話し致します事柄の数々によって、確かめていただきたいと思います。

さて今まで言霊の原理が世の中の表面から隠されてしまったことについてお話ししてきたのですが、それなら、隠されたものがどんな経緯で今お話しているような言霊の学問として蘇ってきたのか、ということになります。

隠されたものが、真に二千年の長い間隠されていたのですが、それが現れる歴史については次項「言霊学の歴史 その三」としてお話しすることになります。

その 278 につづく

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 278

言霊学の歴史 4

言霊学の歴史その三

筆者が事細かくお話をしますと、読者の中には二千年も前に世の中から隠されてしまった言霊の原理と
いうものが、どうして再びこの世の中に復活してくることができたのだろう、と疑問を持たれる方もいらっしや
ることと思います。そこで近代の言霊の原理についての歴史をお話することにしましょう。

物は焼けてしまえば跡形もなくなります。けれどもその物を作ったり見たりした人の記憶は長い間残りま
す。一度人の心の記憶に印画されたものは、その人 一代はもちろん、子々孫々の心の中に受け継がれ、
消え去ることはありません。そして必要があれば、その責任を負う人の頭脳を通じて記憶として蘇るものな
のです。

ましてそれが民族の言語を生んだ原理ともなれば、その言語がその民族によって語られ、それによって民族の歴史が作られている限り、言霊の原理が時来れば、再び復活することは当然ということが出来ましよう。

第十代崇神天皇により 言霊の原理の政治への適用が廃止され、世の人々から言霊の原理の存在は次第に忘れ去られていったのですが、その後の歴史の中で、その行跡や遺された文章などによって言霊の原理を明らかに、またはある程度知っていたと思われる人々の名前を挙げるすることができます。

「古事記」を撰上した太安麻呂、「日本書紀」撰上の舎人親王、その他、役小角、柿本人麻呂、菅原道真、空海、日蓮などなどです。

これらの人たちが遺された行跡や文章から、言霊のことをどのように表現していたかを考察するのは興味あふれる問題ではありますが、紙面の関係上、今回は省略することにいたします。

近代になって初めて言霊の原理の存在を知り、言霊研究の先鞭をつけられたのは明治天皇であります。

天皇の御歌の中には「敷島の道」とか「言の葉の誠の道」という言葉が数多く見られますが、これらの言葉

は現在世の中で言われているような単なる 三十一文字（みそひともじ）の和歌の道のことではなく、

言霊の原理を指したものののです。明治天皇の御製に次のような歌があります。

聞き知るはいつの世ならむ敷島の 大和言葉の高き調べを

しるべする人をうれしく見出てけり我が言の葉の道の行手に

天地を動かすはかり言の葉の誠の道を極きわめてしかな

古代において三十一文字の和歌は、ただ単に事物や感情を歌うだけではなく、その中に言葉の原理を巧みに織り込むことによって言霊の原理（布斗麻邇）の修業を積む方法であったのです。万葉集から古今集まで和歌にはそのような歌が幾多発見されます。

その 279 につづく

島田正路氏著「コトタマ学入門」より抜粋

その 279

言霊学の歴史 5

明治天皇の皇后となられた昭憲皇太后が一条家よりお腰入れ折り、そのお道具の中に言葉の誠の道に関する書物が入っていて、天皇は皇后と共に言霊の原理の存在に気付かれた、と伝えられています。

明治天皇が日本民族の伝統である言の葉の誠の道（言霊布斗麻邇）の真理に精通しようといかに希望されていたか、前記のお歌がよくそれを物語っているように思われます。

明治天皇・皇后二方の「古事記」上つ巻に基づく言霊学研究のお相手を務めたのが山腰弘道氏（旧尾張藩士、皇后付の書道家）でありました。氏は筆者に言霊学を教えてくれた小笠原孝次氏のそのまた先生であった山腰明将氏の父親であります。

太平洋戦争後に亡くなられた山腰明将氏の遺された文章の中に「古事記」の神代の巻きに出てくる神様の名前がそれぞれアイウエオ五十音の一つ一つと結び合わせられていました。

前に説明したことですが古事記の神様の名前と五十音の一つ一つを結びつける作業は1人や2人の人の研究だけでは到底出来ない言霊学の奥義でありますので、この奥義は、多分長い間宮中に秘蔵

されていたものであろうことが推測されます。

山腰氏の学問を受け継いだ小笠原孝次氏の生涯をかけた研究によって、その時まで全く信仰的・哲学的でありました言霊の学問が、現在生きている人間の心の学問として、考える人間の心の構造を明らかにした精神の科学として体系的にまとめ上げられたのでした。

日本語を話す人ならば誰しも、自分の心を反省してその心の仕組みを考えていけば、必ず到達することができる精密な学問体系としての完成されたものでした。

希望する人なら誰でも、古代の日本人の先祖がそうであったそのままの姿で、人類の第一の文明の真髄であった精神の原理をマスターすることができるようになりました。アイウエオ五十音言霊の原理は、二千年の暗黒の歴史の中から不死鳥のように蘇った、とすることができるであります。

その 280 につづく